

CeMI 気象防災支援・研究センター News Letter

Contents

1. 気象防災アドバイザーを
活用してみませんか！
2. 洪水キキクルと水害リスクラインの一体化
3. お天気よもやま話
～4月の真夏日



1 気象防災アドバイザーを活用してみませんか！

令和2年12月にはじめて「気象防災アドバイザー」が国土交通大臣から委嘱されました。それから2年余りたち、令和5年3月現在、委嘱された気象防災アドバイザーは全国で110名いるとのこと。また、34自治体での活動実績があることが報告されています（気象庁HPより）。

令和4年度には、気象予報士を対象とした気象防災アドバイザー研修も行われていますので、この4月にはかなりの数のアドバイザーが誕生することでしょう。

さて、気象防災アドバイザーは何をするのでしょうか。たとえば、2019年10月の時点では気象防災アドバイザー制度はありませんでしたが、ニュースレターの2022年10月号でも書いたように、台風接近で緊迫する災害対策本部等でのアドバイスを行ったことで、判断が的確に行えたとの評価をいただいています。

気象庁から提供される気象情報は、年々精度が向上しているとともに情報の密度や内容も高度化しています。さらに、土砂災害や洪水害の情報もあります。これらの沢山の情報を読み解いて、避難指示などの防災対応の適時的確な判断することは、なかなか難しいのではないのでしょうか。それをサポートするのが「気象防災アドバイザー」というわけです。

もちろん、いざという時のアドバイスに限らず、平時でもいろいろな役割があります。

右の気象庁HPに掲載しているリーフレットによると、地元の気象台だけではなく手がまわらない普及啓発活動や講演会、タイムライン（事前防災行動計画）をはじめとした防災計画の作成支援等の役割もあります。

気象防災アドバイザーを活用して、地域の防災力の向上を目指してみませんか。

基本は、地元の気象台にご相談いただければ良いのですが、環境防災総合政策研究機構

（通称CeMI）でも、複数の気象防災アドバイザーが在籍していますので、ご相談ください。複数名での対応が可能で、今はWebでも業務を行うことができるため、いざという時も、気象防災アドバイザーが不在になるリスクはありません。いくつもの自治体等に対して支援の実績もあります。いかがでしょう。

**あなたのまちに
気象防災アドバイザーを**

みんなのお悩みありませんか？

- 避難情報の発令を適切にできるか不安
- 住民への周知啓発をもっと充実させたい
- 地域に特化した気象解説を聞きたい

そのお悩み
気象防災アドバイザー
にお任せください

気象防災アドバイザーは、国土交通大臣から委嘱を受けた、地域に精通した気象の専門家で、気象庁の手の届かないところまで地方公共団体をバックアップします。以下は活動内容の一例です。

平時の対応	大雨等の災害対応時の対応
<ul style="list-style-type: none">日々の気象解説地方公共団体職員を対象とした勉強会地域住民を対象とした講演会やワークショップ避難計画、タイムライン等の策定・改善の支援防災訓練への協力防災気象情報の読み解き能力を向上させる講義イベントの会場周辺の気象の見直し解説	<ul style="list-style-type: none">気象台から提供された情報の解説地域における今後の気象の見通しを詳細に解説（いつ、どこで、どれくらい降るかなど）河川の水位等について解説避難場所に関するポイントに基づき、発生が必要とされる避難情報に関する助言首長・幹部への気象の状況に関する説明

新潟県 三島市 | 群馬県 群馬市 | 群馬県 渋川市

気象庁



2 洪水キキクルと水害リスクラインの一体化

気象庁ホームページのキキクル（危険度分布）は、大雨による災害の危険度を地図上に5段階で色分けして示す情報で、土砂キキクル、浸水キキクル、洪水キキクルの3種類があります。そのうち、洪水キキクルは、大雨による中小河川の洪水の危険度を5段階に色分けして地図上に表したものです。降った雨がどれくらい中小河川に集まってくるのかを計算し、3時間先までの雨の予測値を使って判定して色を付けています。

一方、国土交通省が管理する大きな河川に対しては水害リスクラインという情報があります。水害リスクラインも、洪水の危険度を5段階で地図上に色分けして表しています。6時間先までの水位の予想や堤防の高さなども考慮して、

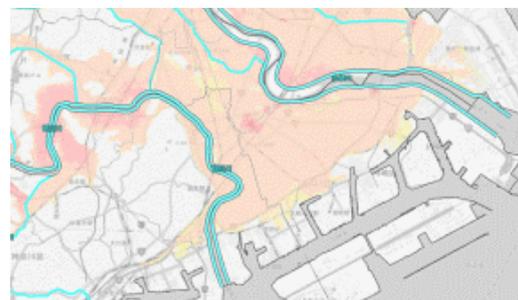


出典：気象庁令和5年2月9日報道発表資料

おおむね200mごとに、川の右側と左側（下流に向かって右側が右岸、左側が左岸といいます。）に分けて危険度を表示します。これまでの、大河

川対象の水害リスクラインと中小河川対象の洪水キキクルを別々のサイトで見ることが必要でしたが、令和5年2月16日から気象庁ホームページの洪水キキクルのページで両方が表示されるようになりました。

洪水キキクルで、ある程度まで拡大していくと、大河川の右岸と左岸の危険度が、別々に2本、色分け表示されるようになりました。これが水害リスクラインの危険度の表示に該当する部分です。一つのサイトで確認できるので、便利になりました。さらに洪水キキクルは、大河川が増水している時の、いわゆるバックウォーター現象による沿川地域の浸水の危険度をヒゲのような印で表示させたり、浸水想定区域を表示させることもできます。川のそばにお住いの皆様には、ぜひとも活用いただきたい情報です。

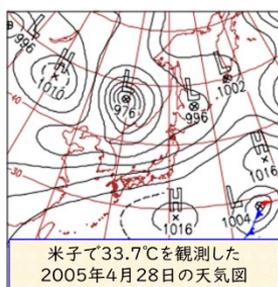


洪水キキクルの表示例（気象庁ホームページより）

さらに洪水キキクルは、大河川が増水している時の、いわゆるバックウォーター現象による沿川地域の浸水の危険度をヒゲのような印で表示させたり、浸水想定区域を表示させることもできます。川のそばにお住いの皆様には、ぜひとも活用いただきたい情報です。

3 お天気よもやま話 ～4月の真夏日

「真夏日」は日最高気温が30℃以上の日です。年間の日数でみると、東京が約52日、大阪が約75日で100日を超える所は那覇など南西諸島の一部に限られます。真夏日が現れるのは5月下旬ころから9月にかけての初夏から秋の初めころですが、時として春のさなかの4月にも現れることがあります。過去の記録を調べてみると、3月に真夏日が現れたのは島嶼部の奄美大島の名瀬と南島島だけですが、4月になると全国各地で最高気温30℃以上が観測されています。最も高い記録は鳥取県米子市で観測された33.7℃、また北海道の斜里郡小清水町でも32.8℃〔1998年4月21日〕の記録があります。この時期、北海道では最低気温が氷点



下まで下がることも珍しくありませんので32.8℃という気温は驚くような値です。

4月になると日照時間も長くなり、日射量も多くなります。また、湿度が比較的低下する時期でもあり、気温が上昇しやすくなります。さらに、低気圧が日本海など日本の

北を通過し、高気圧が日本の南を東進することも多くなることから、南から暖かい空気が流れ込みやすくなります。このような気圧配置になると、日本海側の地方や内陸部・盆地などではフェーン現象が起こり、気温が平年に比べて極端に上昇することがあります。ただ、この時期の気温の極端な上昇は一時的な現象で、真夏日が何日も続くことはありません。したがって防災面からみると直接災害につながるような現象ではありませんが、気温の極端な変化は体調をくずすなど健康面で悪い影響を与えることがあります。また、乾燥した高温の風によって生育途上の農作物などに影響が出たり、火災の拡大要因となることなどもあり、注意は必要です。

気象庁のホームページの“2週間気温予報”では都道府県ごとに主要地点の2週間先までの最低、最高気温の予想と、予測の範囲、平年の値との比較などを見ることができ、2週間先までの予報のため精度がやや落ちることもありますが、気温の変化の傾向や大きな変化の時期などをあらかじめ知ることができます。突然の真夏日の出現など、気温の変化が大きくなる4月にはこうした情報の利用も有効です。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

